
天国からのお礼状

猶清

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からのお礼状

【Nコード】

N1561S

【作者名】

猶清

【あらすじ】

自分のせいで大切な人の命を奪ってしまった。

取り戻す方法は1つ。

契約者となり天から与えられし試練を乗り越えること。
そして、乗り越えたあかしとしてもらえる
”お礼状”を規定数集めること。

第0話

どうしてこんなことになったんだ。

どうしてこんなことにならなくてはいけなかったのか。

コイツが何をしたというんだ。

コイツはとっても良いやつで、こんなだけど実は優しくて、いつも俺のことを優先に考えてくれてて・・・

どうかお願いします。

コイツの命を返して下さい。

俺ならなんでもするから・・・

俺は何を言ってるのだろうか。

俺に言う権利があるのだろうか。

いや、あるはずがない。

ああ、そうだよ。

俺が悪いんだ

俺が・・・

俺が殺したんだ。

第1話 01

目覚めたとき、志藤^{シドウ} 雅鷹^{マサタカ}はそこにいた。
一面に白い景色、周りには何もない。

『何だ・・・？俺はいつたい・・・』

見渡しても誰の姿も声も見えず聞こえず・・・。

「誰か！誰か居んのか！？」

遠くで反響する自分の声。

ここが限りなく広い世界であると判断した。

コツ、コツ、コツ・・・

突如後ろ足音が聞こえてきた。

高いヒールの音、女性なのだろうか。

「誰だ！？」

雅鷹は勢いよく降りかえった。

しかし誰もいない。

「・・・気のせいかな」

足音は自分の気のせい、そう思った雅鷹は
どうすれば元の自分のいた場所に戻るのか
考えていた。

しかしその考えをさえぎるように、

少し低く大人びた、されど暖かい雰囲気の声が聞こえてきた。

「マサタカくん・・・志藤雅鷹くんですね？」

「！」

声は上から聞こえてきた。

雅鷹はとっさに上を見上げた。

そこには男性、というにはどこか女性らしさがあり

きれいに伸びた黒髪、そして焼けるような紅い瞳をもった人が
雅鷹の姿を見降ろしていた。

「初めまして、雅鷹くん。私は雨鼓^{アマツツミ}、上の世界の監視官です」
「は……はあ」

何を言ってるのだろうか。

上の世界、監視官。

雅鷹は目の前にいる人物のいつてることが理解できなかった。

「えーと……よくわかんないけどさ、雨鼓さん？ここはどこなわけ？」

「ここですか？ここは境目ですよ。上と地上の、ね」

その言い方があまりにも恐怖心を抱かせたので、

雅鷹は続きを聞くのをやめた。

『上というのはどういう意味ですか？』

しかし自分は元の場所に变える方法を知らない。

頬をつねっても痛くはない、すなわち夢なのだが、
起きようと思っても起きられないのだ。

「あ……1つ聞きたいんだけど、俺は何でここにいるんだ？

俺は自分のベットで寝ていたはず……」

「それは簡単ですよ。ここは”夢の中の世界”なのですから」

「そんなん知ってる。だけど起きれないんだよ。夢はさめるもんだ
ろ？」

「では、あなたは”覚めることのない夢”の中に迷い込んだ、
それならつじつまが合うでしょう？」

雅鷹は背筋あ凍る思いをした。

雨鼓は笑っている、確かに笑ってはいるが、
目は全く笑っていない。

雅鷹は腰が抜けて、そのまましゃがみこんだ。

「んだよ・・・それ。・・・そんなんの信じねえぞ・・・！」

「ああ、良いですよ。だって、嘘ですから」

「は？」

雅鷹は自分の耳を疑った。

しかし、今確かに雨鼓は”嘘”だと言った。

『なんだよ・・・マジな顔で言いやがって・・・』

腰が抜けた自分をあきれながらその場に立ちあがった。

「大丈夫ですよ、あともう少しすれば目が覚めるでしょう」

「あ、そう」

もう何も言い返す気がしない。

あきれながら座った時に少し汚れた膝やお尻をはたいていると、自分の足が消えかかっているのを見た。

「んな！？何だこれ！」

足だけではなく、下半身も消えかかっている。

「お別れです雅鷹くん。また会う時を楽しみにしていますよ」

「また？またってなんだまたって・・・！」

「あ、それから」

雨鼓は先ほどの”わらっていない顔”を作り
静かな声で呟いた。

「鷹尋くんによく伝えといてください」

「！？」

その時視界が真っ黒になった。

そして、自分の体を襲う違和感のある感覚。

「うわあああああああ！！」

落ちていく感覚。

下は真っ黒の世界。

どこにもつかむところはない。

『死ぬ！』

雅鷹はそう確信し、目をつむった。

第1話02

落ちていく感覚がなくなったところ、雅鷹はそーっと目を開けた。そこは見たことある天井、電気。

「あ・・・あれ？」

起き上がったって周りを見渡す。

見たことのある机、椅子、壁。

そしてまったく消えていない自分の体。

『そうそう・・・これ俺、ここにいたんだよ俺』

やはりさっきのは夢だったのだ。

頬をつねってみる、痛い。

「んだよ。あゝビツクリした」

ホッ、と安心してから制服に着替えて雅鷹は下のリビングに降りる。テーブルの上にはすでに作られている朝食と置手紙があった。

”朝ご飯、早く食べるよ。

食器はちゃんと流しに出しといて

鷹尋”

タカヒロ

雅鷹の弟、鷹尋からの手紙だ。

鷹尋は眉目秀麗、文武両道の絵にかいたような人間だ。

兄の雅鷹より身長が高く、さらに料理などの家事もできる。

雅鷹は幼いころから周囲の人間に鷹尋と比べられてきた。

「ホットケーキかよ・・・。朝からこんな甘いもん食えるか」

そう言っただけで雅鷹は出された朝食をしまおうと、冷蔵庫を開けた。そこには、”兄さんへ”と書かれたお弁当があった。

これも鷹尋が雅鷹に作ったものだ。

鷹尋は自分の分だけではなく、雅鷹の分まで

毎日お弁当を作っていた。

しかし雅鷹はほとんどそれには手をつけず、自分でコンビニで買って食べていた。

鷹尋のことをあまり好いていないため、鷹尋の作ったものを食べる気がしない、ということだ。お弁当を再び冷蔵庫の中へしまい、

違う段に朝食のホットケーキやスープを入れた。

時計を見ると、すでに8時を回っていた。なぜだろうか。

いつもなら走っても学校に間に合おうとするが、今日はそういう気になれなかった。

むしろ学校を休んでしまいたい、と思ったのだ。

雅鷹は学校に「風邪で休みます」と電話をし、2階に上がって自分の部屋へ向かった。

部屋に向かう途中鷹尋の部屋が見える。

とてもきれいで埃1つない部屋。

自分の部屋とは大違いだ。

部屋に入り、ベッドへ飛び込んだ。

鷹尋が昨日干してくれたのだろう。

とても温かく、清潔感があった。

そのままうとうとし、雅鷹は瞼を閉じた。

第1話03

雅鷹が目を覚ましたのは、それから5時間後。
寝すぎたせいで体が重い。

空腹を感じ、下に降りて冷蔵庫を開けた。

鷹尋が雅鷹のために作った料理が並んでいる。

雅鷹はそこからホットケーキを選び、レンジで温めた。

さらにスープを取り出して、コンロで温める。

チーン、とレンジの音を聞き、ホットケーキを取り出した。

きれいな形で絵に描いたようだ。

冷蔵庫からバターとメイプルシロップを取り出して、ホットケーキにかける。

それを切って口の中へ入れる。

少し熱かったが、とけたバターとメイプルシロップがよく絡み、とてもおいしかった。

雅鷹の口に合うように、少し甘めに作ってある。

完食し、温めた野菜スープを飲む。

野菜のダシがよく取れていて、

ホットケーキとのバランスも取れている。

すべて食べ終わり、食器を流しに出す。

テレビをつけても昼ドラなどしかやっていない。

部屋に戻り机に向かった。

机には幼いころの雅鷹と鷹尋の写真。

写真の自分は無邪気な、子供らしい笑顔だ。

昔は鷹尋がいくら自分よりできた人間であろうが、それを証明する術がなかったため
周りからも比較されなかった。

いつからだろうか、

2人に差が出来てしまったのは。

いつからだろうか、

2人に深い溝が出来てしまったのは。

いつからだろうか、

鷹尋が全然笑わなくなったのは。

そう考えると胸が苦しくなるばかりだった。

「・・・ちくしょ」

雅鷹は自身のパソコンを開き、”いつもの場所”へ向かった。
そこは雅鷹が毎日通ってるサイト

”Person easily related”
通称”PEE”。お調子者、という意味だ。

このサイトはチャット部屋であり、

雅鷹は日々あったことをここに記しているのだ。

基本は雅鷹と他の3人で話している。

しかし皆学生なため、今の時間はチャット室には来ていない。

雅鷹がブラウザを閉じよう、そう思った時だった。

『AMDTMさんがご入室されました』

突然入室サインが現れた。

「A・・・M・・・DTM？誰だ・・・？」

このチャット室は自分たち4人しか入れないようパスワードが設定されている。

もしかしたら他の3人の誰かが改名したのかもしれない。

『誰ですか？改名したんですか？』

とりあえず聞いてみる。

しかし返答はない。

少し放置、というのはよくあることなので、雅鷹は続けて聞いてみた。

『黒薔薇さん？^{クロバラ}白百合さん？^{シラユリ}日出さん？^{ヒノデ}』

この3人は他の3人のハンドルネームだ。

この中でよく改名するのは黒薔薇さんと白百合さんの2人だ。どっちかが変えると必ずもう片方も変える。

もしかしたら現実でも友達なのかもしれない。

『AMDTMです』

しかしこのAMDTMという人間は、その3人、どれにも当てはまっていない。

では、何故この部屋がわかったのか。

『この部屋はパスがついてるはず。何で入れたのですか？』

『パスは簡単に破れました。貴方を見ていましたから』

「！！！！？」

悪寒がした。

パソコンがハッキングされたりしているのだろうか。

それとも本当に見られて・・・

冷汗が雅鷹の頬を流れ落ちた時その文は現れた。

『貴方の願いは何ですか？』

「は？」

いきなり何を言ってるのだろうか。

こんなよくある王道の漫画のような展開。

「『おっしゃってる意味がよくわかりませんが？』」

怖いと思った自分が情けなく思ってしまった。

『よくわからないとは？願い事があるのではないのですか？』

『別にありませんけど？』

「ハハッ。何言ってるんだコイツ？」

願い事なら山ほどある。

カツコよくなりたい、身長が高くなりたい、お金持ちになりたい

弟を見下したい、など。

だけどそれは願って叶うものでもない。と雅鷹は知っていた。
願って願いが叶うなら

この世に”努力”なんて言葉はないだろう。

『すみませんが、只今の時刻を教えてください』

遂に時間まで分からなくなったのか。

コイツがこの部屋に来たのはただの偶然。
見てたと言うのもただのハツタリ。

俺をビビらせるためだった、と雅鷹は思い

『14時38分ですが、大丈夫ですか？』

と皮肉たつぷりに返信した。

”コイツは少し頭がおかしい”

そう判断した矢先だった。

『そうですか。まだそちらでは21時30分ではないのですね。

わかりました。私のミスです。

しかし忠告しておきます。

19時25分44秒、あなたの大切な人がお亡くなりになられますよ』

バカらしくて読む気にもなれない。

漫画の世界だったら確かにそういうことが起こってもおかしくない。
しかし・・・

雅鷹は頭の中に19時25分44秒、

それだけを記憶して、返信をせず、違うサイトへ飛んだ。

第1話04

ガチャ

「ただいまー」

弟の声が聞こえた。

時計を見ると既に19時を回っていた。

雅鷹はあれからずっとゲームをしていたのだ。

画面を見すぎていたせいで起こる目のクラクラに

顔をゆがませながらも、雅鷹はパソコンを落とし、1階へ降りた。

「あ、兄さんただいま。今日学校休んだんだって？」

「ああ」

「全くどうせ遅くまでゲームしてたんでしょ？しょうがないなあ」
本音を言つとそれは正しい。

昨日は夜遅くまでゲームをしていた。

ズル休みで休んだつもりだったが、少し喉が痛いのはそのせいだろう。

「うつせ。お前には関係ないだろ」

「母さんと父さんがいないからってハメはずしたらダメだろ？」

2人から言われてるんだよ。”雅鷹のことよろしくな”って」

雅鷹はピクツと眉間にしわを寄せた。

普通は兄に弟をよろしく、と伝えるであろうに。

どっちが兄だかわからない今の現状が雅鷹は大嫌いだった。

「とりあえず兄さん、風邪薬置いとくから飲んでね。

あとおかゆとか作るから寝ててよ」

「いらねえ。今お腹すいてねえもん」

「そんなこと言ってると何時までたっても治らないよ？」

鷹尋の言うことはいつも正しい。

それはわかってるつもりだった。

自分よりも何倍も正しく、賢い弟。

ふと見上げた時計が目に入った。

” 19時00分 ”

『 そうですねえアイツ ” 19時25分 ” に誰か死ぬって・・・ 』

そんなことを信じてるわけない。

だが、少し興味がある。

” 自分の大切な人 ”

身内、友達・・・

思いあたるふしはたくさんあるが、その中の1人となると誰なのか見当もつかない。

「・・・さん、兄さん・・・兄さん！」

「えっ？何？」

「だから早く部屋で寝てて、って言ってるの」

「はあ？大丈夫だよ」

「良いから早く！あとでお粥とか持つてくから！」

その時、世話焼きすぎる弟にイラっときたのだろうか。

それとももしかしたら魔の手が差して、そう言うようにさせられたのだろうか。

「うつせーなさつきから！いらねえって言ってるんだろ！？しつけないだよ！」

昔からそうだよな。自分は良い子です、みたいなことばかりやがって」

「ベ・・・別にそういうわけじゃ・・・」

「そうやって否定するところも変わってねえよな！マジむかつくんだよお前！」

ハッ和我に返った。

自分は何を言ってるのだろうか。

今の言い方はない。兄として、いや人間として

自分を心配してくれている人に向かって言う言葉ではなかった。

「あ・・・鷹尋っ・・・」

心が痛んだ。

雅鷹は咄嗟に家を飛び出した。

鷹尋の表情が、

とても悲しそうで、今にも泣きそうだったから。

第1話05

「はぁ・・・」

咄嗟に飛び出したものの何も持ってきていない。

あるとすればポケットに入ってた1000円札。

おまけに裸足のまま靴を履いて出てきたため足が痛い。

しかし家に帰る、というのも嫌だった。

あんな顔見せられてはかける言葉がない。

「俺の馬鹿・・・」

そう言つてとりあえず追つてこないように少しでも家を離れよう
そう思いながら雅鷹は歩いて行つた。

只今の時刻” 19時23分”

例の時刻まであと2分28秒。

もちろん”AMDTM”の言葉を信じてるわけではない。

ただ気になるのだ。

『まだそちらでは19時44分ではないのですね』

まるで雅鷹が19時44分には何か、どうしてもかなえたい願ひ事
があるような・・・

そんなことを考えながら歩いてると、
遂にその時刻はやってきた。

” 19時25分20秒”

あと22秒で例の時刻になる。

半ばドキドキしながら時計を見つめる。

あと3・・・2・・・1・・・。

” 19時25分44秒”

周りで騒いでる気配は何もない。

町はいつものにぎやかな雰囲気

なにも起こっていないかった。

「なんだよーやっぱりな！」

肩の荷が下りたようにホッと一安心した。

それと同時に不思議と鷹尋に謝ろうとという気持ちが芽生えた。

そうだ、帰り際に鷹尋が好きな苺タルトでも買っていこう。

そして一緒に食べよう。

雅鷹はポケットの中の1000円札を握りしめて、ケーキ屋さんへ走り出した。

第1話06

雅鷹はケーキ屋へ行き、
真つ赤な苺に乗った苺タルトを買った。

間に生クリームが大量に挟まれ、下のタルト生地にもこだわって作られている。

初めて食べた時、その時は鷹尋とケンカした後だった。
しかし、その苺タルトを食べてから、
喧嘩していたのが嘘のように、2人とも笑顔になった。

そんなことを思い出しながら歩いていると、
自然と自分が笑っていることに気づく。

早く帰って誤って、そして2人で食べよう。
そう思いながら夜の道を歩いて行った。

ザワザワ・・・

「？」

何だろうか、自分の家の周りに人が大勢集まっている。
遠いのでよくみえないが、人の泣き声まで聞こえてくる。

『19時25分44秒、あなたの大切な人がお亡くなりになられますよ』

「まさか・・・」

まさか。そう思ったが、雅鷹は自分の考えを捨てることができなかった。

心臓の鳴りが治まらない。

雅鷹は走って家に向かった。

「雅鷹くん！」

「雅鷹・・・！」

周囲の視線が雅鷹に向いた。

「あ・・・あの！いったい何があったんですか！？」

周りの人間はみな視線をそらしている。

鳴りやまない心臓の音、胸の奥底からこみあげてくるこの気持ち。身体全身がふるえている。

「志藤雅鷹くん、ですか？」

家の中から突然呼ばれ、雅鷹はハツとした。

その声の主は警官だった。

今気付いたが、家の周りにも、中にもたくさんの警官がいる。

一体・・・何があったというんだ！！

「雅鷹くん。どうぞあちらへ」

そう言つて警官は雅鷹を家の奥に向かわせた。

「な・・・何があったんですか！？」

そう何度も聞いたが、警官は目を伏せるばかりで何も答えなかった。

第1話07

向かった場所はリビング。

そこには警官や監視、様々な人が調べ物をしていた。
みな雅鷹の存在に気がつくと手を止め、
軽く会釈をした。

雅鷹は気付いていた。

この部屋の匂いがひどいことを。

生臭い、”血”の匂い。

雅鷹の心臓は先程よりも高なっている。

気持ちの悪さも抑えきれないところまできていた。

複数の警官が雅鷹の方を見ながら話合っている。

雅鷹の目の前にはブルーシートがある。

正しく言うと、何かを覆っているブルーシート。

雅鷹はそのブルーシートからはみだしている血に目をそらした。

しばらくすると2人の警官が雅鷹に近づき、

「ご自身の目でご確認ください」

そう言ってブルーシートを退けた。

第1話08

世の中とはなぜこんなにも残酷なのだろうか。

雅鷹は警官ブルーシートを退けてからも何度も何度も願っていた。

『どうか自分の考えとは違いますように』

しかし、天は雅鷹の味方をしてはくれなかった。とても残酷な現実を雅鷹に突き付けた。

ブルーシートに覆われていたのは、

この家の次男。

雅鷹の実の弟。

鷹尋だった。

雅鷹は足の力が抜け座り込んだ。

「志藤鷹尋、14歳。無数の傷が顔にあります、致命傷は胸のナイフだと思われます。」

雅鷹は鷹尋の顔を見た。

確かに無数の殴られたような跡がある。

必死に抵抗したのだろう。

警官が詳しく話している間

雅鷹は茫然と、ただ鷹尋の眠る顔を見た。

警官の話なんてほとんど耳に入れなかった、が1つだけ、どうしても聞きたいことがあった。

「あの・・・鷹尋の死亡時刻はいつなんですか・・・？」

まさか、とは思ったが、その時は確信していた。

「死亡時刻は・・・19時25分だと推測しています」

ああ。そうなのか。

19時25分、その時の自分は家からかなり離れた場所にいた。
だから気付かなかったのだ。

時計を見た。

もう30分も前の話になる。

最悪な結末となってしまった。

あんなひどいことを言ってしまった。

自分のことしか考えなかった罰なのだろうか。

「どうして・・・」

雅鷹は無意識に口を開いていた。

「どうして鷹尋が殺されなくちゃいけなかったんですか・・・？」

コイツは・・・鷹尋はすごい奴だったのに・・・

自分のことより俺のことばっか考えてくれて、

飯だって俺の好きなもんばっか作ってくれて、

全部・・・全部俺中心で・・・

なのに・・・なんでだよ！！！！！！」

涙が止まらない。

どうして鷹尋が殺されたのか、

それだけがどうしてもわからなかった。

警官も皆雅鷹の方を見ていた。

中には涙を流している人もいた。

2人で食べるために買った莓タルトは

無残にも崩れていた。

第1話09

雅鷹はその後ずっと泣き続けた。

気持ちが治まるまで2階にいてください

、と警官に言われ、

言われた通り自分の部屋のベッドの上で泣いていた。

この家は立ち入り禁止になるので、

しばらく出なければならぬ。

泣きつかれた頃雅鷹は荷物の準備をし始めた。

バッグには何日分の服、いろんな私物。

それらをまとめていると、机の上の写真が目に入った。

無邪気に笑っていたあの頃。

もう1度戻れるなら・・・。

そう思わざるえなかった。

大体の荷物をまとめた頃、

雅鷹はしばらく使えなくなるのでパソコンを開いた。

いつものチャット室へ入室。

まだ誰も来ていない。

とりあえず跡を残しておくか、と

『しばらく私用で来れません。ご了承ください』

と打ち込んだ。

『AMD TMさんが入室されました』

この言葉が目に入ってきたのは今まさにパソコンを閉じようと思った時だった。

「!・・・コイツ」

「19時25分、大切な人がお亡くなりになりましたね」
「！」

「予言通りだったでしょう？」

雅鷹は悔しさを抑えきれなかった。

机をバンツと強くたたき、髪をくしゃくしゃに掻いた。

「何が言いたい？」

「願う事はないのですか？」

雅鷹の手が止まった。

昼間とまったく同じことを言ってる。

「願う事が貴方にはあるのでしょうか？」

咄嗟に時計を見た。

”21時25分”

全てコイツの思い通りだとも言うのか……。

雅鷹は力強くキーボードをたたいた。

「願えば必ずかなうのか？」

「あなたがそう望むのなら」

本音を言うと言っていたわけじゃない。

だけど、今この時はコイツの言うことを信じるほかなかった。

正に猫の手も借りたい、ということだった。

「願う事を打ち込んでください」

「……」

雅鷹は今度は静かに、ゆっくりと打ち込んだ

「”鷹尋の命を返して下さい”」

ゆっくり、重くエンターキーを押した。

写真の鷹尋のことを見ながら。

自分は何をやっているのだろう。

こんなことして叶うなんてバカげてる。

鷹尋がいなくなったショックで自分の頭もどうかしているのだ。

それでも会いたかった、
鷹尋に。

そして今度こそ、一緒に莓タルトを食べようと
雅鷹は願った、
その時だった。

―ブーン―

突然パソコンの画面が暗くなった。

「な・・・どうしたんだ!？」

雅鷹はすぐに他の変化にも気がつき、窓の外を見た。
町じゅう灯りが無い。

街灯も家の明かりも全て・・・

何一つついてなかった。

「ど・・・どういうことだよ、おい・・・」

雅鷹は怖くなって部屋のドアを勢いよく開けた。

しかし、本来あるはずの廊下はなく、

下には黒いモヤモヤしたものが渦を巻いていた。

雅鷹は部屋に戻り窓から出ようと思ったが、

窓がビクともしない。

鍵がかかってるわけでもない。

雅鷹は完全に部屋に閉じ込められてしまった。

第1話09（後書き）

第1話終了です。

次からやっと話が進みます。

感想お待ちしております。

第2話 01

「なんだよこれ・・・どうなってんだよ！」

雅鷹は助けを呼ぼうと携帯をとりだしたが、
ずっと”圏外”の文字が浮かび上がっている。

パソコンも開こうとしたが、

先程突然暗くなってから何の反応もない。

何もできなくなった雅鷹は、よろめいてベットに倒れこんだが、しかし、そこはベットではなかった。

「んあ！？何でこんなところに・・・！」

ベットには穴が開いていた。真っ黒な穴。

雅鷹はそれに気づかず倒れこんだため、

下に落ちて行った。

「うわあああああああああああ！！！！！！」

真っ暗でゴールが見えない。

俺も死んだのかな・・・。

そう思った雅鷹だった。

しかしこの感覚、どこかで感じたものと一緒にだった。

落ちていく感覚、そう最近だった。

どこかで・・・

そんなことを考えていると、

目の前に光が見えた。

とてもまぶしく目が開けられないほどの光。

雅鷹は必死に目をつむって流れに身をゆだねた。

「…………ん」

落ちていく感覚が無くなり、雅鷹は目を開けた。
そこは一面真っ白な世界。

「…………！こっつて！」

みたことのある世界。

そう、昨日夢の中で見た世界にそっくりだった。

一面白く、何にも見えない世界。

自分の姿でさえもうつすらとしていた。

「今は夢…………じゃないよな」

ここに来たのなら、会える人物がいる。ハズ。

夢の中はそうだった。

しかし今は夢ではない。

着ている服も全て落ちる前と変わっていない。

コツ…………コツ…………

背後から近づいてくる足音。

聞き覚えのあるヒールの足音だった。

ハッと振り返って後ろを見た。

「こんにちは。雅鷹くん」

聞き覚えのある声、姿。

あの人物だ。

「…………雨鼓…………」

夢の中で出会った人物。

どこか女性らしさがあり、

きれいに伸びた黒髪、そして焼けるような紅い瞳をもった人物。

「覚えてて下さったんですね、光栄です。」

しかし年上の人を呼び捨てにするのはどうかと思いますが」

どこか恐怖心を抱かせるような言い方をする。

「…………すいません」

「ハイ、ちゃんと謝る子は良い子ですね」

優しいその笑顔に隠された冷たい瞳。

雅鷹はおびえながらも雨鼓に問いかけた。

「ここは・・・一体どこなんですか？何故俺はここに来たんですか？
それであなたは一体・・・」

「少し待ってください、質問は1つずつお答えしましょう。
まず1つ目は以前”夢”の中でお答えしたとおりです。

ここは天と地上の境目、ですよ」

やはりこの人物は夢の中で会った人物を同じなのだ。

雅鷹は確信した。

「そして2つ目、あなたはここに来なければならない理由があった」
「理由？」

「そして3つ目の質問ですが・・・」

雅鷹はごくつと息をのんだ。

「残念ながらお答えすることはできません」

「・・・は？」

第2話02

雅鷹は驚いて、雨鼓のことを睨みあげた。

「答えられないって・・・どういうことだよ!？」

「そのままの意味ですよ。答えられません。」

正しく言つと・・・”今は答えられない”ですけど

雨鼓はそう言つて、雅鷹の左腕をつかんで壁に押し付けた。

雅鷹の左腕に激痛が走る。

「な・・・にしゃがるっ!」

「貴方、このままでは死にますよ?」

「!?!?」

雅鷹はつかまれた左手を振りほどこうとするが、

掴まれた力が余りにも大きく、動く余計痛みが増した。

「以前もそうだったでしょう? 貴方はここから出ようと思っても出られなかった。」

しかし、私が来たことにより貴方は出られた。

つまり、貴方が戻るためには私が必要なんですよ」

以前のことを思い出した。

夢だとわかっていてもどうにも起きられない。

しかし雨鼓が来て、”もうすぐ覚める”と言つたら
本当に起きることができた。

「じゃあ・・・ここにいと自然に死ぬってことか?」

「そういうことですね。このままだと確実にあなたの体は崩壊しますね」

とんでもないことを笑顔で言つんだな・・・と逆に少し感心してしまつた。

雅鷹は掴まれた左手を振りほどこうとするのをやめ、
全身の力を抜いた。

「俺が助かる方法は・・・ないのかよ？」

「今のままではありません」

雅鷹はがっくりと足の力を抜き

俺もここで死ぬのかな・・・

そう思った、が

ふいに疑問に思った。

「今のまま・・・？」

先程もそうだった。

”今は答えられない”

そう確かに雨鼓は言った。

そして今も・・・

「今のままじゃなければさっきの答えも教えてくれるし、俺も死なずに済むんだな？」

雨鼓はワツと感心したように口を開いた。

「そうですよ、賢い子は好きですね。」

「じゃあどうやったら”今”の状況から変われるんだ？」

雨鼓は掴んでいた力を緩め、雅鷹の左手を解放した。

雅鷹は足の力が入っていないため、その場にしゃがみこんだ。

「契約すればいいんですよ」

「え？」

雅鷹は雨鼓を見上げた。

その表情は笑っているのにとても冷たい目。

雅鷹は全身が震えだした。

「契約すれば、貴方は死なずに済みます」

「契約！？」

そういうことか・・・とため息をついた。

契約すればここから出られる、しかしそのかわりに

契約した代償もとられる、というやつか。

「・・・契約すればいいんだな？」

「そうですね、あまり驚かないんですね」

「いや・・・よくあるパターンだろ？漫画とかで」

雨鼓は漫画を知らないのだろう。

ポケっとした表情でこちらを見てきた。

「んじゃ早く契約しようぜ。どうやればいいんだ？」

「あ、そうですね、じゃあ・・・」

そう言っただけで雨鼓は懐から一枚の紙とボールペンを取り出した。

そしてそれを雅鷹の前に突き出し、言葉をつづけた。

「この名前とかその他もろもろを書き込んでください」

「へ？・・・契約ってコレ！？」

「そうですね？普通じゃないですか」

いやいや・・・こういうときの契約は大抵

なんか紋章付いたり契約印とかじゃないのかっ！？

雅鷹はあまりに現代的な契約の仕方に驚いたが、

その契約書の項目を見た。

フリガナ
？ 名前

？ 住所

？ 電話番号

？ 生年月日

？ 好きな食べ物

？ 嫌いな食べ物

？ 願い事

「・・・どこのプロフィールだよ」

「ぶろふいーる？」

「あ、いや。なんでもない」

「？、？、？、？まではわかるが」

下の3つの意味がわからなかった。

食べ物って何の関係もない気がした。

とりあえず書かないと契約は進まない。
雅鷹はしぶしぶ契約書を書き始めた。

第2話03

最後の項目を書き終えた後、
雅鷹は雨鼓にボールペンと一緒に
契約書を渡した。

雨鼓はそれをしっかり見て、よしっとうなずいた。

「OKですね。契約書に漏れはありません、が・・・
これはいいのですか？」

そう言つて雨鼓は契約書を雅鷹に見せ、
”？願い事”の欄を指さした。

雅鷹の願い事・・・『鷹尋の命を救う』

「これでいいつて・・・良いに決まってるだろ？」
「そうですか・・・」

雨鼓は驚いたようにもう一度契約書に目を通した。

「それじゃこの内容でよろしいですね？」
「良いつて言ってるだろ」

雅鷹は少しムツとし、雨鼓を睨みあげた。

しかしそんな行為も雨鼓はさりと流した。

「かしこまりました。それでは契約を開始します」

雨鼓はどこからか長い杖を取り出し、先端を雅鷹に向けた。
そして、口を開いた。

「志藤雅鷹。あなたは願いをかなえるために己を差し出すと誓うか」
「お・・・己!？」

「この契約は貴殿の命が減じるまで存続する。これを受け入れるか」
「なっ・・・」

雅鷹は突然のことに大きく動揺した。

己を差し出す、の意味がわからなかったからだ。
つまり自分の”自由”が失われる、ということなのか。

「今なら契約を破棄することが出来る。しかし、その場合ここから

は出られなくなる」

簡単にいえば今、命を差し出して自由を失うか、
今、死ぬか。

そのどちらかでしかなかった。

「さあ、選べ。志藤雅鷹」

だが、雅鷹に考える暇はなかった。

自分が選択するのは1つ。

「俺は、己を差し出して・・・鷹尋の命を救ってやる!!!」

その瞬間雅鷹に向けられていた杖の先端が光った。

あまりのまぶしさに目が開けられなかった。

「志藤雅鷹の契約を認証した。よってここに新たな使者が生まれた
！」

使者・・・なんのことだ？

「貴殿は今宵から天の国からの使者となり、この地上にあふれている
”悩”を救うのだ」

天の国・・・地上・・・”悩”・・・？

「”悩”を救った分だけ手紙を受け取れる。その手紙が集まった時、
貴殿の願いはかなうだろう」

手紙・・・それを集めれば・・・

雅鷹は意識が遠くなり、何も考えることができなくなった。
『一体・・・俺はどうなるんだろう・・・』

第3話 01

今日の夢は懐かしい夢だった。

鷹尋と自分と父と母・・・。

5年前、交通事故で両親が他界。

よく祖父祖母が自分らを可愛がってくれたのをよく覚えている。

母が笑っている。

父が笑っている。

鷹尋が笑っている。

そして自分は・・・

泣いている？

今はみんないるのに。

みんな自分の手を握ってくれているのに。

笑顔でいてくれるのに。

ああ、そうか。

”現実”は誰もいないからか。

ピピピ・・・ピピピ・・・

目ざまし時計が朝を告げる。

ピピピ・・・ピ・・・

その目ざまし時計のボタンに手を置く。

何か良い夢を見ていた気がする。

しかし何も覚えていなかった。

雅鷹は時計を見た。

” 7時30分 ”

昨日はあれからどうしたのか。

白い世界に行って、契約して、光を見て・・・
それから・・・。

「それから・・・どうしたんだ？」

あのまま雅鷹は倒れてしまった。

その後の記憶は何もない。

雅鷹は周りを見渡した。

ここは自分の部屋ではなかった。

いや・・・自分の家ではないのだ。

それもそうだ、殺人事件があつた家にいられるわけがない。

雅鷹は自分の服を見た。

袖のところに血が付いている。

あれは夢ではなかったのだ。

夢だったらどれだけ良かっただろうか・・・。

雅鷹は血を避けるように服の袖をまくった。

そして雅鷹はもう1つの異変に気付いた。

「何だ・・・？これ・・・」

自分の手首にはめられている銀色の腕輪。

真ん中には黒い十字架がはめ込まれている。

とても綺麗だ。しかし、その美しさに恐怖さえ感じるほどだ。

「おや、とてもお似合いですよ、雅鷹くん」

突然聴こえるその声。とてもきれいな声だが、どこか冷たさを感じさせる。

バツとその声のする方へ振り向くと、

窓から白と黒の羽が大量に舞い込んできた。

そして・・・

「・・・！雨鼓！！」

やはり彼だった。

全てのことを知っているであろう人物。

「そんなに睨みあげないでください。可愛い顔が台無しですよ？」
「うっせ！気持ち悪いこと言ってくんな！」

それよりなんだよこれ！」

雅鷹は雨鼓に手首をつきだした。

雅鷹の手首につけられた腕輪を見た雨鼓はクスリと笑った。

「それは契約の証ですよ。それを付けているってことは契約が成立した証拠です」

「契約・・・」

全て現実だった。

雅鷹は心のどこかで今までのことが夢ではないか、と思っていた。

「頑張つて手紙—もといお礼状を集めてくださいね」

「お礼状・・・？」

「ええそうですよ。手紙を集めると言っただけでしょう？手紙というのは大きな分類で、

ホントはお礼状、というのですよ」

そういえば言っていた気がする、と雅鷹はゆっくり思い返してみた。
お礼状を集めれば願いがかなう・・・。そう言っていた。

「お礼状のほかに、なにかあるのか？」

「ええ。他には嫌疑状というのがありますよ。簡単にいえばお礼状とは全く逆の

意味をなしているものですね」

「お礼状って・・・」悩”を救ったら貰えるって・・・。

それ、実際はどうしたらいいんだ！？」

「・・・救えばいいのですが・・・。まあ実際に行った方がわかるでしょう」

雨鼓は1枚の紙を取り出して、雅鷹に見せた。

そこには黒いペンで”志藤道真 9：48”と書かれていた。

「志藤道真って・・・俺のじいちゃんの名前だ・・・」

「この紙は契約した者にしか見えません。よくその辺にたくさん紙

が落ちてるでしょう。

直接あなたに届く場合もあります。

この紙の意味は、志藤道真さんシトウミチサネは9時48分に何か悩みを抱える、ということですよ」

「つまり、その悩みを救えれば、お礼状は貰えるってこと？」

「まあ・・・そういうことになりますね」

16時26分にじいちゃんは悩みを抱える。

それを救えればお礼状が貰える。

雅鷹は時計を見た8時13分。

その時間はもうすぐやってくる。

そして今、雅鷹はその祖父の家にいる。

「俺って結構ラッキー人間なんじゃね？」

「は・・・はあ？」

「俺頑張るわ！よつし、そうときまれば・・・」

雅鷹は急いで部屋を飛び出し、階段を駆け下りていった。

「おはよう！じいちゃん！ばあちゃん！」

「雅鷹！」

ドアを開けた瞬間、祖母の彰子アキコが雅鷹に抱きついた。

「辛かったねえ・・・苦しかったろう・・・？」

鷹尋のことだろう。

祖母としても自分の孫を亡くしたのだ。相当辛いだろう。

「大丈夫だよばあちゃん。俺は・・・」

彰子のすすり泣く声が聞こえた。

雅鷹はそつと彰子の背に手をまわした。

少しやせている。髪の毛も白髪が混ざっていた。

彰子はとても綺麗な黒髪を持っていた。

しかし今は見る影もない。

「ばあちゃん、俺昨日から何も食べてないんだ」

「あ、そうよねえ。今とっておきに朝食を作るから」

「ありがとう」

雅鷹はソファに腰掛けた。

『ばあちゃん・・・目、腫れてたな・・・』

たくさん泣いたのだろう。

そう考えると少し胸が痛んだ。

「雅鷹」

第3話02

「じいちゃん！」

9時48分に悩みを抱える張本人、道真だ。

「辛かったな・・・雅鷹・・・」

「じいちゃん・・・」

同じく目が腫れている。

雅鷹はすつと立ちあがって道真の前に立った。

「俺は大丈夫だよ。それよりも鷹尋の真相を知りたいよ・・・」

「そうだな・・・一体どうして・・・あんな良い子が・・・」

”良い子”。その言葉が雅鷹の胸に響いた。

そのいい子にひどいことを言つて、そのまま・・・。

雅鷹は目をつむって頭を抱えた。

思い返すと俺は何て残酷なことをしてしまったんだろう。

俺は・・・。

「雅鷹！どうした？具合でも悪いのか？」

「あ・・・大丈夫だよ。ちよつとお腹すきすぎて貧血気味で・・・」

「雅鷹、ご飯できたよ！いらつしやい」

「うわあ・・・すげえ・・・」

テーブルに並ぶたくさんの料理。

色とりどりで食欲を誘う。

そして、雅鷹の好物ばかりだった。

思えば鷹尋に料理などの家事を教えたのは彰子だった。

5年前、両親を亡くした雅鷹と鷹尋を助けてくれたのは祖父と祖母だ。

どちらにも頭が上がらない。

「いただきます」

ゆつくりと箸を口に運ぶ。

シャキシヤキと音がする。

新鮮な野菜で作った色とりどりのサラダ。

鷹尋の料理と同じ味がした。

「うまい！やっぱあちゃんは料理うまいや！」

「ふふ・・・ゆっくり食べな。ゼーんぶアンタのだからね」

「良かったなあ雅鷹。わしも少し・・・」

「じいさんはさつき食べたでしょ！」

「あは・・・」

鷹尋が死ぬ前までと同じやりとり。

この2人はいつもこうだった。

どんなに辛いことがあっても同じように接してくれる。

今、もししんみりしてたらたまらなかっただろう。

「ごちそうさま！やっぱおいしいなあ」

「ありがとう雅鷹。お茶入れるからゆっくりしてな」

ふっ、とため息をついて再びソファに腰掛けた。

ちらつと気になり時計を見る

” 9 時 0 0 分 ”

その時間まであと48分。

今の様子からすると何もならないように思えるが・・・。

「雅鷹ー。お茶飲みなさい」

「あ、うん」

湯呑を持つ。

入れたてなのでとても熱かった。

しかし、中身はそうでもない。

飲みやすく、そして味が深い・・・。

飲み終わり雅鷹は2階へ上がり寝ていた部屋に戻った。

この部屋は昔、雅鷹の母、つまり彰子らの娘が使っていたものだ。ずっと綺麗に保たれている。

「おや、おかえりなさい雅鷹君。どうでしたか？」
・・・そうか、コイツがいたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1561s/>

天国からのお礼状

2011年10月8日23時57分発行